

源氏物語

帚木

紫式部

青空文庫

中川の皐月さつきの水に人似たりかたればむ

せびよればわななく
(晶子)

光源氏ひかるげんじ、すばらしい名で、青春を盛り上げてできたような人が思われる。自然奔放な

好色生活が想像される。しかし実際はそれよりずっと質素しじみな心持ちの青年であつた。その上恋愛という一つのことの後世へ自分が誤つて伝えられるようになってはと、異性との交渉をずいぶん内輪うちわにしていたのであるが、ここに書く話のような事が伝わっているのは世間がおしやべりであるからなのだ。自重してまじめなふうの源氏は恋愛風流などには遠かつた。好色小説の中の交野かたのの少将などには笑われていたであらうと思われる。

中将時代にはおもに宮中の宿直所とのいどころに暮らして、時たまにしか舅しゅうとの左大臣家へ行かないので、別に恋人を持つているかのような疑いを受けていたが、この人は世間にぎらにあるような好色男の生活はきらいであつた。まれには風変りな恋をして、たやすい相手でない人に心を打ち込んだりする欠点はあつた。

梅雨つゆのころ、帝みかどの御謹慎日が幾日かあつて、近臣は家へも帰らずに皆宿直とのいする、こんな

日が続いて、例のとおりに源氏の御所住まいが長くなった。大臣家ではこうして途絶えの多い嬪君を恨めしくは思っていたが、やはり衣服その他贅ぜい沢たくを尽くした新調品を御所の桐壺きりつばへ運ぶのに倦うむことを知らなんだ。左大臣の子息たちは宮中の御用をするよりも、源氏の宿直所への勤めのほうが大事なふうだった。そのうちでも宮様腹の中將は最も源氏と親しくなっていて、遊戯をするにも何をするにも他の者の及ばない親交ぶりを見せた。大事がる舅の右大臣家へ行くことはこの人もきらいで、恋の遊びのほうが好きだった。結婚した男はだれも妻の家で生活するが、この人はまだ親の家のほうにりっぱに飾った居間や書斎を持っていて、源氏が行く時には必ずついて行って、夜も、昼も、学問をするのも、遊ぶのもいっしょにしていた。謙遜もせず、敬意を表することも忘れるほどびったりと仲よしになっていた。

五月雨さみだれがその日も朝から降っていた夕方、殿上役人の詰め所もあり人影がなく、源氏の桐壺も平生より静かな気のする時に、灯ひを近くともしていろいろな書物を見ていると、その本を取り出した置き棚だなにあった、それぞれ違った色の紙に書かれた手紙かたの殻からの内容をとうのちゆうじよう頭かみ中將は見たがった。

「無難なのを少しは見せてもいい。見苦しいのがありますから」

と源氏は言っていた。

「見苦しくないかと気になさるのを見せていただきたいのですよ。平凡な女の手紙なら、私には私相当に書いてよこされるのがありますからいいんです。特色のある手紙ですね、怨みを言っているとか、ある夕方に来てほしそうに書いて来る手紙、そんなのを拝見できたらおもしろいだろうと思うのです」

と恨まれて、初めからほんとうに秘密な大事の手紙などは、だれが盗んで行くか知れない棚などに置くわけもない、これはそれほどの物でないのであるから、源氏は見てもよいと許した。中将は少しずつ読んで見て言う。

「いろんながありますね」

自身の想像だけで、だれとか彼とか筆者を当てようとするのであった。上手じょうずに言い当てるのもある、全然見当違いのことを、それであろうと深く追究したりするのもある。そんな時に源氏はおかしく思いながらあまり相手にならぬようにして、そして上手に皆を中将から取り返してしまった。

「あなたこそ女の手紙はたくさん持つているでしょう。少し見せてほしいものだ。そのあとなら棚のを全部見せてもいい」

「あなたの御覧になる価値のある物はないでしょうよ」

こんな事から頭中将は女についての感想を言い出した。

「これならば完全だ、欠点がないという女は少ないものであると私は今やつと気がつきました。ただ上つづらな感情で達者な手紙を書いたり、こちらの言うことに理解を持つているような利巧らしい人はずいぶんあるでしょうが、しかもそこを長所として取ろうとすれば、きつと合格点にはいるという者はなかなかありません。自分が少し知っていることで得意になって、ほかの人を軽蔑することのできる厭味な女が多いんですよ。親がついていて、大事にして、深窓に育っているうちは、その人の片端だけを知って男は自分の想像で十分補つて恋をすることになるというようなこともあるのですね。顔がきれいで、娘らしくおおうで、そしてほかに用がないのですから、そんな娘には一つくらいの芸の上達が望めないこともありますからね。それができると、仲に立った人間がいいことだけを話して、欠点は隠して言わないものですから、そんな時にそれはうそだなどと、こちらも空で断定することは不可能でしょう、真実だろうと思つて結婚したあとで、だんだんあらが出てこないわけはありません」

中将がこう言つて歎息した時に、そんなありきたりの結婚失敗者ではない源氏も、何

か心にうなずかれることがあるか微笑をしていた。

「あなたが今言った、一つくらいは芸ができるというほどのとりえね、それもしできない人があるだろうか」

「そんな所へは初めからだれもたまされて行きませんよ、何もとりえのないのと、すべて完全であるのとは同じほどに少ないものでしょう。上流に生まれた人は大事にされて、欠点も目立たないで済みますから、その階級は別ですよ。中の階級の女によってはじめてわれわれはあざやかな、個性を見せてもらうことができるのだと思います。またそれから一段下の階級にはどんな女がいるのだから、まあ私にはあまり興味が持てない」

こう言つて、通^{つう}を振りまく中將に、源氏はもう少しその觀察を語らせたく思つた。

「その階級の別はどんなふうにつけるのですか。上、中、下を何で決めるのですか。よい家柄でもその娘の父は不遇で、はじめな役人で貧しいのと、並み並みの身分から高官に成り上がつていて、それが得意で贅^{ぜいたく}沢な生活をして、初めからの貴族に負けないふうにいる家の娘と、そんなのはどちらへ属させたらいいのだろう」

こんな質問をしている所へ、左馬頭^{さまのかみ}と藤式部^{とうしきぶ}丞^{のじよう}とが、源氏の謹慎日を共にしようとして出て来た。風流男という名が通つていゝような人であつたから、中將は喜んで左馬

頭を問題の中へ引き入れた。不謹慎な言葉もそれから多く出た。

「いくら出世しても、もとの家柄が家柄だから世間の思わくだってやはり違う。またもとはいい家でも逆境に落ちて、何の昔の面影もないことになってみれば、貴族的な品のいいやり方で押し通せるものではない、見苦しいことも人から見られるわけだから、それはどちらの中品のですよ。受領ずりようといつて地方の政治にばかり関係している連中の中にもまたいろいろ階級がありましてね、いわゆる中の品として恥ずかしくないのがありますよ。また高官の部類へやつとはいれたくらいの家よりも、参議にならない四位の役人で、世間からも認められていて、もとの家柄もよく、富んでのんきな生活のできている所などはかえって朗らかなものですよ。不足のない暮らしができるのですから、儉約もせず、そんな空気の家に育った娘に輕蔑けいべつのできないものがたくさんあるでしょう。宮仕えをして思いがけない幸福のもとを作ったりする例も多いのですよ」

左馬頭がこう言う。

「それではまあ何でも金持ちでなければならぬんだね」

と源氏は笑っていた。

「あなたらしくないことをおっしゃるものじゃありませんよ」

中将はたしなめるように言った。左馬頭はなお話し続けた。

「家柄も現在の境遇も一致している高貴な家のお嬢さんが凡庸であつた場合、どうしてこんな人ができたのかと情けないことだろうと思います。そうじゃなくて地位に相応なすぐれたお嬢さんであつたら、それはたいして驚きませんね。当然ですもの。私らにはよくわからない社会のことですから上の品は省くことにしましょう。こんなこともあります。世間からはそんな家のあることなども無視されているような寂しい家に、思いがけない娘が育てられていたとしたら、発見者は非常にうれしいでしょう。意外であつたということは十分に男の心を引く力になります。父親がもういいかげん年寄りで、醜く肥ふとつた男で、風采うさひのよくない兄を見ても、娘は知れたものだど輕蔑している家庭に、思い上がった娘がいて、歌も上手であつたりなどしたら、それは本格的なものではないにしても、ずいぶん興味が持てるでしょう。完全な女の選にははいりにくいでしょうがね」

と言いながら、同意を促すように式部丞のほうを見ると、自身の妹たちが若い男の中で相当な評判になつていることを思つて、それを暗に言っているのだと取つて、式部丞は何も言わなかつた。そんなに男の心を引く女がいるであろうか、上の品にはいるものらしい女の中にだつて、そんな女はなかなか少ないものだと自分にはわかつているがと源氏は思

つていらしい。柔らかい白い着物を重ねた上に、袴はかまは着けずに直衣のうしだけをおおように掛けて、からだを横にしている源氏は平生よりもまた美しく、女性であつたらどんなにきれいな人だろうと思われた。この人の相手には上の上の品の中から選んでも飽き足りないことであろうと見えた。

「ただ世間の人として見れば無難でも、実際自分の妻にしようとする、合格するものは見つからないものですよ。男だつて官吏になつて、お役所のお勤めというところまでは、だれもできますが、実際適所へ適材が行くということはむずかしいものですからね。しかしどんなに聡明そうめいな人でも一人や二人で政治はできないのですから、上官は下僚に助けられ、下僚は上に従つて、多数の力で役所の仕事は済みますが、一家の主婦にする人を選ぶのには、ぜひ備えさせねばならぬ資格がいろいろと幾つも必要なのです。これがよくてもそれには適しない。少しは譲歩してもまだなかなか思うような人はない。世間の多数の男も、いろいろな女の関係を作るのが趣味ではなくても、生しょうがい涯がいの妻を捜す心で、できるなら一所懸命になつて自分で妻の教育のやり直しをしたりなどする必要のない女はないかとだれも思うのでしょうか。必ずしも理想に近い女ではなくても、結ばれた縁に引かれて、それと一生を共にする、そんなのはまじめな男に見え、また捨てられない女も世間体がよ

いことになります。しかし世間を見ると、そう都合よくはいっていませんよ。お二方のような貴公子にはまして対象になる女があるのですか。私などの気楽な階級の者の中にでも、これと打ち込んでいいのはありませんからね。見苦しくもない娘で、それ相応な自尊心を持っていて、手紙を書く時には蘆手あしでのような簡単な文章を上手に書き、墨色のほのかな文字で相手を引きつけて置いて、もつと確かな手紙を書かせたいと男をあせらせて、声が聞かれる程度に接近して行つて話そうとしても、息よりも低い声で少ししかものを言わないというようなのが、男の正しい判断を誤らせるのですよ。なよなよとしていて優し味のある女だと思つと、あまりに柔順すぎたりして、またそれが才気を見せれば多情でないかと不安になります。そんなことは選定の最初の関門ですよ。妻に必要な資格は家庭を預かることですから、文学趣味とかおもしろい才気などはなくてもいいようなものですが、まじめ一方で、なりふりもかまわないで、額ひたい髪がみをうるさがつて耳の後ろへはさんでばかりいる、ただ物質的な世話だけを一所懸命にやいてくれる、そんなのではね。お勤めにあれば出る、帰れば帰るで、役所のこと、友人や先輩のことなどで話したいことがたくさんあるんですから、それは他人には言えません。理解のある妻に話さないではつまりません。この話を早く聞かせたい、妻の意見も聞いて見たい、こんなことを思っているとそと

でもひとりえみ独笑が出来ますし、一人で涙ぐまれもします。また自分のことでないことに公憤を起こしまして、自分の心にだけ置いておくことに我慢のできぬような時、けれども自分の妻はこんなことのわかる女でないのだと思うと、横を向いて一人で思い出し笑いをしたり、かわいそうなものなどとひとりごと独言を言うようになります。そんな時に何なんですかと突つけんどん慥貪に言つて自分の顔を見る細君などはたまらないではありませんか。ただ一概に子供らしくておとなしい妻を持った男はだれでもよく仕込むことに苦心するものです。たよりなくは見えても次第に養成されていく妻に多少の満足を感じるものです。一いっしょ緒にいる時は可憐さが不足を補つて、それでも済むでしょうが、家を離れている時に用事を言つてやりましても何ができましょう。遊戯も風流も主婦としてすることも自発的には何もできない、教えられただけの芸を見せるにすぎないような女に、妻としての信頼を持つことはできません。ですからそんなのもまただめです。平生はしつくりとかぬ夫婦仲で、淡い憎しみも持たれる女で、何かの場合によい妻であることが痛感されるのもあります」

こんなふうな通つうな左馬頭にも決定的なことは言えないと見えて、深い歎息ためいきをした。

「ですからもう階級も何も言いません。容貌きりようもどうでもいいとします。片よつた性質でさえなければ、まじめで素直な人を妻にすべきだと思います。その上に少し見識でもあれ

ば、満足して少しの欠点はあってもよいことにするのですね。安心のできる点が多ければ、趣味の教育などはあとからできるものですよ。上品ぶって、恨みを言わなければならぬ時、も知らぬ顔で済ませて、表面は賢女らしくしていても、そんな人は苦しくなってしまうと、すこもんく 凄文句や身にしませる歌などを書いて、思い出してもらえる材料に残して、遠い郊外とか、まったく世間と離れた海岸とかへ行ってしまう。子供の時に女房などが小説を読んでいるのを聞いて、そんなふうの女主人公に同情したものでしてね、りっぱな態度だと涙までもこぼしたものです。今思うとそんな女のやり方はけいちよう 軽佻で、わざとらしい。自分を愛していた男を捨てて置いて、その際にちよつとした恨めしいことがあっても、男の愛を信じないように家を出たりなどして、無用の心配をかけて、そうして男をためそうとしているうちに取り返しのならぬはめに至ります。いやなことです。りっぱな態度だなどとほめたてられると、図に乗ってどうかすると屁なんかにもなります。その時はきかない未練は持たずに、すっかり恋愛を清算した気でいますが、まあ悲しい、こんなにまであきらめておしまいになってなどと、知った人が訪問して言い、真底から憎くはなっていない男が、それを聞いて泣いたという話などが聞こえてくると、召使や古い女房などが、殿様はあんなにあなたを思っというらしいに、若いおからだを屁になどしておし

まいになつて惜しい。こんなことを言われる時、短くして後ろ梳ずきにしてしまつた額髪に
手が行つて、心細い氣になると自然に物思ひをするようになります。忍んでももう涙を一
度流せばあとは始終泣くことになります。御弟子みでしになつた上でこんなことでは仏様も未練
をお憎みになるでしょう。俗であつた時よりもそんな罪は深くて、かえつて地獄へも落ち
るように思われます。また夫婦の縁が切れずに、尼にはならず、良人おとに連れもどされて
来ても、自分を捨てて家出をした妻であることを良人に忘れてもらうことはむずかしいで
しょう。悪くてもよくてもいっしょにいて、どんな時もこんな時も許し合つて暮らすのが
ほんとうの夫婦でしょう。一度そんなことがあつたあとでは眞実の夫婦愛がかえつてこな
いものです。また男の愛がほんとうにさめている場合に家出をしたりすることは愚かです
よ。恋はなくなつていても妻であるからと思つていっしょにいてくれた男から、これを機
会に離縁を断行されることにもなります。なんでも穏やかに見て、男にほかの恋人がで
きた時にも、全然知らぬ顔はせずに感情を傷つけない程度の怨うらみを見せれば、それでまた愛
を取り返すことにもなるものです。浮氣うわきな習慣は妻次第でなおつていくものです。あまり
に男に自由を与えすぎる女も、男にとつては氣樂で、その細君の心がけがかわいく思われ
そうでありますが、しかしそれもですね、ほんとうは感心のできかねる妻の態度です。つ

ながれない船は浮き歩くということになるじゃありませんか、ねえ」

中将はうなずいた。

「現在の恋人で、深い愛着を覚えていながらその女の愛に信用が持てないということはよくない。自身の愛さえ深ければ女のあやふやな心持ちも直して見せることができるはずだが、どうだろうか。方法はほかにありませんよ。長い心で見えていくだけです」

と頭中とうのちゆうじゆう將は言つて、

自分の妹と源氏の中はこれに当たっているはずだと思ふのに、源氏が目を閉じたままで何も言わぬのを、物足らずも口惜くちおしくも思った。左馬頭さまのかみは女の

品定めしんさだめの審判者であるというような得意な顔をしていた。中将は左馬頭にもつと語らせた
い心があつてしきりに相槌あいづちを打っているのであつた。

「まあほかのことにして考えてごらんさい。指物師さしものしがいろいろな製作をしましても、

一時的な飾り物で、決まった形式を必要としないものは、しやれた形をこしらえたものな
どに、これはおもしろいと思わせられて、いろいろなものが、次から次へ新しい物がいい
ように思われますが、ほんとうにそれがなければならぬ道具どうぐというような物を上手じょうずに
こしらえ上げるのは名人でなければできないことです。また絵所えどころに幾人も画家がいます
が、席上の絵の描き手かきに選ばれておおぜいで出ます時は、どれがよいのか悪いのかちよつ

とわかりませんが、非写實的な蓬萊山とか、荒海の大魚とか、唐にしかない恐ろしい獣の形とかを描く人は、勝手ほうだいに誇張したもので人を驚かせて、それは実際に遠くてもそれで通ります。普通の山の姿とか、水の流れとか、自分たちが日常見ている美しい家や何かの図を写生的におもしろく混ぜて描き、われわれの近くにあるあまり高くない山を描き、木をたくさん描き、静寂な趣を出したり、あるいは人の住む邸の中を忠実に描くような時に上手と下手の差がよくわかるものです。字でもそうです。深味がなくて、あちこちの線を長く引いたりするのに技巧を用いたものは、ちよつと見がおもしろいようでも、それと比べてまじめに丁寧に書いた字で見栄えのせぬものも、二度目によく比べて見れば技巧だけで書いた字よりもよく見えるものです。ちよつとしたことでもそうなんです、まして人間の問題ですから、技巧でおもしろく思わせるような人には永久の愛が持てないと私は決めています。好色がましい多情な男にお思ひになるかもしれないかもしれませんが、以前のことを少しお話しいたしましょう」

と言つて、左馬頭は膝を進めた。源氏も目をさまして聞いていた。中将は左馬頭の見方を尊重するというふうを見せて、頬杖について正面から相手を見ていた。坊様が過去未來の道理を説法する席のようで、おかしくないこともないのであるが、この機会に各自の

恋の秘密を持ち出されることになった。

「ずっと前で、まだつまらぬ役をしていた時です。私に一人の愛人がございました。容ようば

貌うわきなどはとても悪い女でしたから、若い浮気うわきな心には、この人だけで一生を暮らそう

とは思わなかったのです。妻とは思っていましたが物足りなくて外に情人も持つていました。それでとても嫉妬しつとをするものですから、いやで、こんなふうでなく穏やかに見ていて

くれればよいのにと思いながらも、あまりにやかましく言われますと、自分のような者をどうしてそんなにまで思うのだろうとあわれむような気になる時もあった、自然身持ちが修まっていくようでした。この女というのは、自身にできぬものでも、この人のためには

と努力してかかるのです。教養の足りなさも自身でつとめて補って、恥のないようにと心が

がけるたちで、どんなにも行き届いた世話をしてくれまして、私の機嫌きげんをそこねまいとする心から勝ち気もあり表面に出さなくなり、私だけには柔順な女になって、醜きりようい容貌おつと

なんでも私にきらわれまいとして化粧に骨を折りますし、この顔で他人に逢あっては、良人おつと

の不名誉になると思つては、遠慮して来客にも近づきませんし、とにかく賢妻にできてい

ましたから、同棲どうせいしているうちに利巧りこうさに心が引かれてもいきましたが、ただ一つの嫉し

妬つと癖、それだけは彼女自身すらどうすることもできない厄やっかい介なものでした。当時私はこ

う思つたのです。とにかくみじめなほど私に参っている女なんだから、懲らすような仕打ちに出ておどして嫉妬やきもちやきを改造してやろう、もうその嫉妬ぶりに堪えられない、いやでならないという態度に出たら、これほど自分を愛している女なら、うまく自分の計画は成功するだろうと、そんな気で、ある時にわざと冷酷に生まして、例のとおり女がおこり出している時、『こんなあさましいことを言うあなたなら、どんな深い縁で結ばれた夫婦の中でも私は別れる決心をする。この関係を破壊してよいのなら、今のような邪推でも何でももつとするがいい。将来まで夫婦でありたいなら、少々つらいことはあつても忍んで、気にかけないようにして、そして嫉妬のない女になったら、私はまたどんなにあなたを愛するかしれない、人並みに出世してひとかどの官吏になる時分にはあなたがりっぱな私の正夫人でありうるわけだ』などと、うまいものだと思ひながら利己的な主張をしたものです。女は少し笑つて、『あなたの貧弱な時代を我慢して、そのうち出世もできるだろうと待っていることは、それは待ち遠しいことであつても、私は苦痛とも思いません。あなたの多情さを辛抱しんぼうして、よい良人になつてくださるのを待つことは堪えられないことだと思ひますから、そんなことをお言いになることになつたのは別れる時になつたわけです』そう口惜くちおしそうに言つてこちらを憤慨させるのです。女も自制のできない性質で、私

の手を引き寄せて一本の指にかみついてしまいました。私は『痛い痛い』とたいそうに言
つて、『こんな傷までもつけられた私は社会へ出られない。あなたに侮辱された小役人は
そんなことではいよいよ人並みに上がってゆくことはできない。私は坊主にでもなること
にするだろう』などとおどして、『じゃあこれがいよいよ別れだ』と言つて、指を痛そう
に曲げてその家を出て来たのです。

『手を折りて相見しことを数ふればこれ一つやは君がうきふし

言いぶんはないでしょう』と言うと、さすがに泣き出して、

『うき節を心一つに数へきてこや君が手を別るべきをり』

反抗的に言つたりもしましたが、本心ではわれわれの関係が解消されるものでないこと
をよく承知しながら、幾日も幾日も手紙一つやらずに私は勝手かっな生活をしていたのです。
加茂かもの臨時祭りの調ちやうがく樂が御所であつて、更ふけて、それは曇みぞれが降る夜なのです。皆が退

散する時に、自分の帰って行く家庭というものを考えるとその女の所よりないのです。御所の宿直室で寝るのもみじめだし、また恋を風流遊戯にしている局つぼねの女房たすを訪ねて行くことも寒いことだろうと思われるものですから、どう思っているのだろうと様子も見がてらに雪の中を、少しきまりが悪いのですが、こんな晩に行つてやる志で女の恨みは消えてしまふわけだと思つて、はいつて行くと、暗い灯ひを壁のほうに向けて据すえ、暖かそうな柔らかない、綿のたくさんはいつた着物を大きな炙あぶり籠かごに掛けて、私が寝室へはいる時に上げる几帳きちょうのきれも上げて、こんな夜にはきつと来るだろうと待つていたふうが見えます。そう思つていたのだと私は得意になりましたが、妻自身はいません。何人かの女房だけが留る守すをしていまして、父親の家へちやうどこの晩移つて行つたというのです。艶えんな歌も詠よんで置かず、気のきいた言葉も残さずに、じみにすつと行つてしまつたのですから、つまらない気がして、やかましく嫉妬をしたのも私にきらわせるためだったのかもしれないなどと、むしやくしやるものですからありうべくもないことまで忤そんたく度たくしましたものです。しかし考えてみると用意してあつた着物なども平生以上によくできていますし、そういう点では実にありがたい親切が見えるのです。自分と別れた後のことまでも世話していったのですからね、彼女がどうして別れうるものかと私は慢心して、それからのち手紙で交渉

を始めましたが、私へ帰る気がないでもないようだし、まったく知れない所へ隠れてしまおうともしませんし、あくまで反抗的態度を取ろうともせず、『前のようなふうでは我慢ができない、すっかり生活の態度を変えて、一夫一婦の道を取ろうとお言いになるのなら』と言っているのです。そんなことを言っても負けて来るだろうという自信を持って、しばらく懲らしてやる気で、一婦主義になると言わず、話を長引かせていますうちに、非常に精神的に苦しんで死んでしまいましたから、私は自分が責められてなりません。家の妻というものは、あれほどの者でなければならないと今でもその女が思い出されます。風流ごとにも、まじめな問題にも話し相手にすることができましたし、また家庭の仕事はどんなことにも通じておりました。染め物の立田姫にもなれたし、七夕たなばたの織姫にもなれたわけです」

と語った左馬頭は、いかにも亡き妻なが恋しそうであつた。

「技術上の織姫でなく、永久の夫婦の道を行っている七夕姫だったらよかったですね。立田姫もわれわれには必要な神様だからね。男にまずい服装をさせておく細君はだめですよ。そんな人が早く死ぬんだから、いよいよ良妻は得がたいということになる」

中将は指をかんだ女をほめちぎった。

「その時分にまたもう一人の情人がありましたね、身分もそれは少しいし、才女らしく歌を詠^よんだり、達者に手紙を書いたりしますし、音楽のほうも相当なものだったようです。感じの悪い容貌^{きりよう}でもありませんでしたから、やきもち焼きのほうを世話女房にして置いて、そこへはおおり通って行つたところにはおもしろい相手でしたよ。あの女が亡くなりましたあとは、いくら今さら愛惜しても死んだものはしかたがなくて、たびたびもう一人の女の所へ行くようになりますと、なんだか体裁屋で、風流女を標^{ひょうぼう}榜^{ぼう}している点^{てん}が気に入らなくて、一生の妻にしてもよいという気はなくなりました。あまり通わなくなつたところに、もうほかに恋愛の相手ができたらしいのですね、十一月ごろのよい月の晩に、私が御所から帰ろうとすると、ある殿上役人が来て私の車へいっしょに乗りました。私はその晩は父の大納言^{だいなんごん}の家へ行つて泊まろうと思つていたのです。途中でその人が、『今夜私を待つている女の家があつて、そこへちよつと寄つて行つてやらないでは気が済みませんから』と言うのです。私の女の家は道筋に当たっているのですが、こわれた土堀^{どべい}から池が見えて、庭に月のさしているのを見ると、私も寄つて行つてやつていいという気になつて、その男の降りた所で私も降りたものです。その男のはいつて行くのはすなわち私の行こうとしている家なのです。初めから今日の約束があつたのでしよう。男は夢中のよう

で、のぼせ上がったふうで、門から近い廊^{ろう}の室の縁側に腰を掛けて、気どったふうに月を見上げているんですね。それは実際白菊が紫をぼかした庭へ、風で紅葉^{もみじ}がたくさん降ってくるのですから、身にしむように思うのも無理はないのです。男は懷中から笛を出して吹きながら合い間に『飛鳥井^{あすかゐ}に宿りはすべし蔭^{かげ}もよし』などと歌うと、中ではいい音のする倭^{やまと}琴^{こと}をきれいに弾^ひいて合わせるのです。相当なものなんですね。律の調子は女の柔らかに弾くのが御簾^{みす}の中から聞こえるものはなやかな氣のするものですから、明るい月夜にはしっくり合っています。男はたいへんおもしろがって、琴を弾いている所の前へ行つて、『紅葉の積もり方を見るとだれもおいでになった様子はありませんね。あなたの恋人はなかなか冷淡なようですね』などといやがらせを言っています。菊を折って行つて、『琴の音も菊もえならぬ宿ながらつれなき人を引きやとめける。だめですね』などと言ってまた『いい聞き手のおいでになった時にはもつとうんと弾いてお聞かせなさい』こんな嫌味^{いやみ}なことを言うと、女は作り声をして『こがらしに吹きあはすめる笛の音を引きとどむべき言の葉ぞなき』などと言ってふざけ合っているのです。私がのぞいていて憎らしがっているのも知らないで、今度は十三絃^{げん}を派手^{はで}に弾き出しました。才女でないことはありませんがきざな氣がしました。遊戲的の恋愛をしている時は、宮中の女房たちとおもしろおかしく

交際していて、それだけでいいのですが、時々にもせよ愛人として通って行く女がそんなふうではおもしろくないと思ひまして、その晩のことを口実にして別れましたがね。この二人の女を比べて考えますと、若い時でさえもあとの風流女のほうは信賴のできないものだ^と知っていました。もう相当な年配になっている私は、これからまたそのころ以上にそうした浮華なものがきらいになるでしょう。いたいたしい萩^{はぎ}の露や、落ちそうな笹^{ささ}の上の霰^{あられ}などにたとえていいような艶^{えん}な恋人を持つのがいいように今あなたがたはお思ひになるでしょうが、私の年齢まで、まあ七年もすればよくおわかりになりますよ、私が申し上げておきますが、風流好みな多情な女には氣をおつけなさい。三角關係を發見した時に良^お人の嫉妬^{つと}で問題を起こしたりするものです」

左馬頭は二人の貴公子に忠言を呈した。例のように中将はうなづく。少しほええんだ源氏も左馬頭の言葉に真理がありそうだと思ふらしい。あるいは二つともばかばかしい話であると笑っていたのかもしれない。

「私もばか者の話を一つしよう」

中将は前置きをして語り出した。

「私がひそかに情人にした女というのは、見捨てずに置かれる程度のものでね、長い關係

になろうとも思わずにかかった人だったのですが、馴なれていくとよい所ができて心が惹ひかれていった。たまにしか行かないのだけれど、とにかく女も私を信頼するようになった。

愛しておれば恨めしさの起おこるわけのこちらの態度だかと、自分のことだけれど気のところがめる時があつても、その女は何も言わない。久しく間を置いて逢あつても始終来る人というようにするので、気の毒で、私も将来のことであるんな約束をした。父親かれんもない人だったから、私だけに頼らなければと思つてゐる様子が何かの場合に見えて可憐かれんな女でした。こんなふうには穏やかなものだから、久しく訪たずねて行かなかつた時分に、ひどいことを私の妻の家のほうから、ちょうどまたそのほうへも出入りする女の知人を介して言わたのです。私はあとで聞いたことなんだ。そんなかわいそうなことがあつたとも知らず、心の中では忘れないでいながら手紙も書かず、長く行きもしないでいると、女はずいぶん心細がつて、私との間に小さな子なんかもあつたもんですから、煩はんもん悶もんした結果、撫なで子しこの花を使いを持たせてよこしましたよ」

中将は涙ぐんでいた。

「どんな手紙」

と源氏が聞いた。

「なに、平凡なものですよ。『山がつの垣は荒るともをりをりに哀れはかけよ撫子の露』
つてね。私はそれで行く気になって、行つて見ると、例のとおり穏やかなものなんですが、
少し物思いのある顔をして、秋の荒れた庭をながめながら、そのころの虫の声と同じよう
な力のないふうでいるのが、なんだか小説のようでしたよ。『咲きまじる花は何れとわか
ねどもなほ常夏とこなつにしくものぞなき』子供のことは言わずに、まず母親の機嫌きげんを取ったの
ですよ。『打ち払ふ袖も露けき常夏あらしに嵐吹き添ふ秋も来にけり』こんな歌をはかなそうに
言つて、正面から私を恨むふうありません。うっかり涙をこぼしても恥ずかしそうに紛
らしてしまうのです。恨めしい理由をみずから追究して考えていくことが苦痛らしかった
から、私は安心して帰つて来て、またしばらく途絶えているうちに消えたようにいなくな
つてしまったのです。まだ生きておれば相当に苦勞をしているでしょう。私も愛していた
のだから、もう少し私をしつかり離さずにつかんでいてくれたなら、そうしたみじめな目
に逢あいはしなかったのです。長く途絶えて行かないというようなこともせず、妻の一人と
して待遇のしようもあつたのです。撫子の花と母親の言つた子もかわいい子でしたから、
どうかして捜し出したいと思つていますが、今に手がかりがありません。これはさっきの
話のたよりない性質の女にあたるでしょう。素知らぬ顔をしていて、心で恨めしく思つて

いたのに気もつかず、私のほうではあくまでも愛していたというのも、いわば一種の片恋と言えますね。もうぼつぼつ今は忘れかけていますが、あちらではまだ忘れられずに、今でも時々はつらい悲しい思いをしているだろうと思われます。これなどは男に永久性の愛を求めようとせぬ態度に出るもので、確かに完全な妻にはなれませんか。だからよく考えれば、左馬頭のお話の嫉妬しつと深い女も、思い出としてはいいでしょうが、今いっしょにいる妻であつてはたまらない。どうかすれば断然いやになつてしまふでしょう。琴の上手じょうずな才女というのも浮氣うわきの罪がありますね。私の話した女も、よく本心の見せられない点に欠陥があります。どれがいちばんよいとも言えないことは、人生の何のこともそうですがこれも同じです。何人かの女からよいところを取つて、悪いところの省かれたような、そんな女はどこにもあるものですか。吉祥きちじやうてん天女を恋人にしようと思うと、それでは仏法くさくなつて困るということになるだろうからしかたがない」

中将がこう言つたので皆笑つた。

「式部の所にはおもしろい話があるだろう、少しずつでも聞きたいものだね」

と中将が言い出した。

「私どもは下の下の階級なんですよ。おもしろくお思ひになるようなことがどうしてござ

いますものですか」

式部丞しきぶのじょうは話をことわっていたが、頭中とうのちゅうじょう将が本気になって、早く早くと話を責めるので、

「どんな話をいたしましたでしょうか、こんなことがございます。まだ文もんじ章生しょうせい時代のことですが、私はある賢女の良人おととになりました。さっきの左馬頭さまのかみのお話のように、役所の仕事の相談相手にもなりますし、私の処世の方法なんかについても役だつことを教えてくれました。学問などはちよつとした博士はかせなどは恥ずかしいほどのもので、私なんかは学問のことなどでは、前で口がきけるものじゃありませんでした。それはある博士の家へ弟子でしになつて通つておりました時分に、先生に娘がおおぜいあることを聞いていたものですから、ちよつとした機会をとらえて接近してしまつたのです。親の博士が二人の關係を知るとすぐに杯を持ち出して白樂天の結婚の詩などを歌ってくれましたが、実は私はあまり気が進みませんでした。ただ先生への遠慮でその關係はつながつておりました。先方では私をたいへんに愛して、よく世話をしまして、夜分寝やすんでいる時にも、私に学問のつくような話をしたり、官吏としての心得方などを言ってくれたりいたすのです。手紙は皆きれいな字の漢文です。仮名かななんか一字だつて混じつておりません。よい文

章などをよこされるものですから別れかねて通っていたのでございます。今でも師匠の恩というようなものをその女に感じますが、そんな細君を持つのは、学問の浅い人間や、まちがいだらけの生活をしている者にはたまらないことだとその当時思っておりまして。またお二方のようなえらい貴公子方にはそんなずうずうしい先生細君なんかの必要はございません。私どもにしましても、そんなのとは反対に齒がゆいような女でも、気に入っておればそれでいいのですし、前生の縁というものもありますから、男から言えばあるがままの女でいいのでございます」

これで式部丞しきぶのじょうが口をつぐもうとしたのを見て、頭中将は今の話の続きをさせようとして、

「とてもおもしろい女じゃないか」

と言うと、その気持ちがあわかっていながら式部丞は、自身をばかにしたふうで話す。

「そういたしましたして、その女の所へずっと長く参らないでいました時分に、その近辺に用のごございましたついでに、寄って見ますと、平生の居間の中へは入れないのです。物越しに席を作つてすわらせませす。嫌味いやみを言おうと思つてゐるのか、ばかばかしい、そんなことでもすれば別れるのにいい機会がとらえられるというものだ」と私は思つていましたが、賢

女ですもの、軽々しく嫉妬しつとなどをするものではありません。人情にもよく通じていて恨んだりなんかもしやしません。しかも高い声で言うのです。『月来げつらい、風病ふうびよう重きに堪えかね極熱ごくねつの草藥を服しました。それで私はくさいのでようお目にかかりません。物越しでも何か御用があれば承りましょう』つてもっともらしいのです。ばかばかり返辞ができるのですか、私はただ『承知いたしました』と言って帰ろうとしました。でも物足らず思つたのですか『このにおいのなくなるころ、お立ち寄りください』とまた大きな声で言いますから、返辞をしないで来るのは氣の毒ですが、ぐずぐずもしてられません。なぜかというひると草藥の蒜ひるなるものの臭氣がいつぱいなんですから、私は逃げて出る方角を考えながら、『ささがにの振舞ふるまひするき夕暮れにひるま過ぐせと言ふがあやなき。何の口実なんだか』と言うか言わないうちに走つて来ますと、あとから人を追いかけて返歌をくれました。『逢あふことの夜をし隔てぬ中ならばひるまも何か眩まばゆからまし』ということです。歌などは早くできる女なのでございます」

式部丞の話はしらずと終わつた。貴公子たちはあきれて、

「うそだろう」

と爪弾つまはじきをして見せて、式部をいじめた。

「もう少しよい話をしたまえ」

「これ以上珍しい話があるものですか」

式部丞は退^{さが}つて行つた。

「総体、男でも女でも、生かじりの者はそのわずかな知識を残らず人に見せようとするから困るんですよ。三史五経の学問を始終引き出されてはたまりませんよ。女も人間である以上、社会百般のことについてまったくの無知識なものはないわけです。わざわざ学問はしなくても、少し才のある人なら、耳からでも目からでもいろいろなことは覚えられています。自然男の知識に近い所へまでいつている女はつい漢字をたくさん書くことになつて、女どうしで書く手紙にも半分以上漢字が混じつてゐるのを見ると、いやなことだ、あの人にこの欠点がなければという気がします。書いた当人はそれほどのできで書いたのではなくても、読む時に音が強くて、言葉の舌ざわりがなめらかでなく嫌^{いや}味になるものです。これは貴婦人もするまちがった趣味です。歌詠^よみだといわれている人が、あまりに歌にとらわれて、むずかしい故事なんかを歌の中へ入れておいて、そんな相手になつてゐる暇のない時などに詠^よみかけてよこされるのはいやになつてしまうことです、返歌をせねば礼儀でなし、またようしないでいては恥だし困つてしまいますね。宮中の節会^{せちえ}の日なんぞ、急

いで家を出る時は歌も何もあつたものではありません。そんな時に菖蒲しやうぶに寄せた歌が贈られる、九月の菊の宴に作詩のことを思つて一所懸命になつてゐる時に、菊の歌。こんな思いやりのないことをしないで場合さえよければ、真価が買つてもらえる歌を、今贈つては目にも留めてくれないということがわからないでよこしたりされると、ついその人が軽蔑けいべつされるようになります。何にでも時と場合があるのに、それに気がつかないほどの人間は風流ぶらないのが無難ですね。知つてゐることで知らぬ顔をして、言いたいことがあつても機会を一、二度ははずして、そのあとで言えばよいだろうと思ひますね」

こんなことがまた左馬頭さまのかみによつて言われている間にも、源氏は心の中でただ一人の恋しい方のことを思い続けていた。藤壺ふじつばの宮は足りない点もなく、才気の見えすぎる方でもないりつばな貴女きじよであるとうなずきながらも、その人を思うと例のとおりに胸が苦しみでいっぱいになつた。いずれがよいのか決められずに、ついには筋の立たぬものになつて朝まで話し続けた。

やつと今日は天氣が直つた。源氏はこんなふうにな宮中にばかりゐることも左大臣家の人に氣の毒になつてそこへ行つた。一条の乱れも見えぬというような家であるから、こんなのがまじめということを一の条件にしていた、昨夜の談話者たちには氣に入るところだ

ろうと源氏は思いながらも、今も初めどおりに行儀をくずさぬ、打ち解けぬ夫人であるのを物足らず思つて、中納言の君、中なかつ務かさなどという若いよい女房たちと冗じようだん談を言いながら、暑さに部屋着だけになつてゐる源氏を、その人たちは美しいと思ひ、こうした接触が得られる幸福を覚えていた。大臣も娘のいるほうへ出かけて来た。部屋着になつてゐるのを知つて、几帳きちようを隔てた席について話そうとするのを、

「暑いのに」

と源氏が顔をしかめて見せると、女房たちは笑つた。

「静かに」

と言つて、脇きようそく息に寄りかかつた様子にも品のよさが見えた。

暗くなつてきたところに、

「今夜は中神のお通り路みちになつておりまして、御所からすぐにごこへ来てお寝やすみになつてはよろしくございません」

という、源氏の家従たちのしらせがあつた。

「そう、いつも中神は避けることになつてゐるのだ。しかし二条の院も同じ方角だから、どこへ行つてよいかわからない。私はもう疲れていて寝てしまいたいのに」

そして源氏は寢室にはいった。

「このままになすつてはよろしくございません」

また家従が言つて来る。紀伊守^{きののかみ}で、家従の一人である男の家のことが上申される。

「中川辺でございますがこのごろ新築いたしまして、水などを庭へ引き込んでございまして、そこならばお涼しかろうと思います」

「それは非常によい。からだが大儀だから、車のままではいれる所にしたい」

と源氏は言つていた。隠れた恋人の家は幾つもあるはずであるが、久しぶりに帰つてきて、方角除^よけにほかの女の所へ行つては夫人に済まぬと思つてゐるらしい。呼び出して泊まりに行くことを紀伊守に言つと、承知はして行つたが、同輩のゐる所へ行つて、

「父の伊予守——伊予は太守の国で、官名は介^{すけ}になつてゐるが事実上の長官である——の家の方にこのごろ障^{さわ}りがありまして、家族たちが私の家へ移つて来てゐるのです。もとから狭い家なんですから失礼がないかと心配です」と迷惑げに言つたことがまた源氏の耳にはいると、

「そんなふうに人がたくさんゐる家がうれしいのだよ、女の人の居所が遠いような所は夜がこわいよ。伊予守の家族のゐる部屋の几帳^{きちよう}の後ろでいいのだからね」

冗談じようだん 混じりにまたこう言わせたものである。

「よいお泊まり所になればよろしいが」

と言つて、紀伊守は召使を家へ走らせた。源氏は微行しのびで移りたかったので、まもなく出かけるのに大臣へも告げず、親しい家従だけをつれて行つた。あまりに急だと言つて紀伊守がこぼすのを他の家従たちは耳に入れないで、寢殿しんでんの東向きの座敷を掃除そうじさせて主人へ提供させ、そこに宿泊の仕度したくができた。庭に通した水の流れなどが地方官級の家としては凝こつてできた住宅である。わざと田舎いなかの家らしい柴垣しばがきが作つてあつたりして、庭の植え込みなどもよくできていた。涼しい風が吹いて、どこでともなく虫が鳴き、螢ほたるがたくさん飛んでいた。源氏の従者たちは渡殿わたしのの下をくぐつて出て来る水の流れに臨んで酒を飲んでいた。紀伊守が主人をよりよく待遇するために奔走している時、一人でいた源氏は、家の中をながめて、前夜の人たちが階級を三つに分けたその中の品の列にはいる家であるうと思ひ、その話を思い出してゐた。思ひ上がった娘だという評判の伊予守の娘、すなわち紀伊守の妹であつたから、源氏は初めからそれに興味を持つていて、どの辺の座敷にいるのであろうと物音に耳を立てていると、この座敷の西に続いた部屋で女の衣摺きぬずれが聞こえ、若々しい、媚めかしい声で、しかもさすがに声をひそめてものを言つたりしているの

に気がついた。わざとらしいが悪い感じもしなかった。初めその前の縁の格子こうしが上げたままになっていたのを、不用意だといって紀伊守がしかって、今は皆戸がおろされてしまったので、その室の灯影ほかげが、襖からかみ子の隙間すきまから赤くこちらへさしていた。源氏は静かにそこへ寄って行って中が見えるかと思つたが、それほどの隙間はない。しばらく立つて聞いていると、それは襖子の向こうの中央の間に集まつてしているらしい低いさざめきは、源氏自身が話題にされているらしい。

「まじめらしく早く奥様をお持ちになつたのですからお寂しいわけですわね。でもずいぶん隠れてお通いになる所があるんですって」

こんな言葉にも源氏ははつとした。自分の作っているあるまじい恋を人が知って、こうした場合に何とか言われていたらどうだろうと思つたのである。でも話はただ事ばかりであつたから皆を聞こうとするほどの興味が起こらなかった。式部卿しきぶきょうの宮の姫君に朝顔を贈つた時の歌などを、だれかが得意そうに語つてもいた。行儀がなくて、会話の中に節をつけて歌を入れたがる人たちだ、中の品がおもしろいといつても自分には我慢のできぬこともあるだろうと源氏は思つた。

紀伊守が出て来て、灯籠とうろうの数をふやさせたり、座敷の灯ひを明るくしたりしてから、主

人には遠慮をして菓子だけを献じた。

「わが家とはばり帳ちようをも掛けたればつて歌ね、大君来ませ婿にせんつてね、そこへ気がつかないでは主人の手落ちかもしれない」

「通人でない主人でございまして、どうも」

紀伊守は縁側でかしこまっていた。源氏は縁に近い寢床で、仮臥かりねのように横になっていた。随行者たちももう寝たようである。紀伊守は愛らしい子供を幾人も持っていた。御所の侍童を勤めて源氏の知った顔もある。縁側などを往来ゆきぎする中には伊予守の子もあつた。何人かの中に特別に上品な十二、三の子もある。どれが子で、どれが弟かなどと源氏は尋ねていた。

「ただ今通りました子は、亡なくなりました衛門督えもんのかみの末の息子むすこで、かわいがられていたのですが、小さいうちに父親に別れまして、姉の縁でこうして私の家にいるのでございます。将来のためにもなりますから、御所の侍童を勤めさせたいようですが、それも姉の手だけではかばかしく運ばないのでございましょう」

と紀伊守が説明した。

「あの子の姉さんが君の継母なんだね」

「そうでございます」

「似つかわしくないお母さんを持つたものだね。その人のことは陛下もお聞きになつていらつして、宮仕えに出したいと衛門督が申していたが、その娘はどうなつたのだろうか、いつかお言葉があつた。人生はだれがどうなるかわからないものだね」

老成者らしい口ぶりである。

「不意にそうなつたのでございます。まあ人というものは昔も今も意外なふうにも変わつてゆくものですが、その中でも女の運命ほどはかないものはございません」

などと紀伊守は言っていた。

「伊予介は大事にするだろう。主君のように思うだろうな」

「さあ。まあ私生活の主君でございますかな。好色すぎると私はじめ兄弟はにがにががつております」

「だって君などのような当世男に伊予介は譲つてくれないだろう。あれはなかなか年は寄つてもりつぱな風采ふうさいを持つているのだからね」

などと話しながら、

「その人どちらにいるの」

「皆下屋しもやのほうへやってしまったのですが、間にあいませんで一部分だけが残っているかもしれません」

と紀伊守は言った。

深く酔った家従たちは皆夏の夜を板敷で仮寝してしまったのであるが、源氏は眠れない、一人臥ねをしていると思うと目がさめがちであった。この室の北側の襖からかみ子の向こうに人のいるらしい音のする所は紀伊守の話した女のそつとしている室であろうと源氏は思った。かわいそうな女だとその時から思っていたのであったから、静かに起きて行って襖子越しに物声を聞き出そうとした。その弟の声で、

「ちよいと、どこにいらつしやるの」

と言う。少し涸かれたきれいな声である。

「私はここで寝やすんでいるの。お客様はお寝みになったの。ここと近くてどんなに困るかと思つていたけれど、まあ安心した」

と、寢床から言う声もよく似ているので姉弟であることがわかった。

「廂ひさしの室でお寝みになりましたよ。評判のお顔を見ましたよ。ほんとうにお美しい方だった」

一段声を低くして言っている。

「昼だったら私ものぞくのだけれど」

睡む^ねそうに言つて、その顔は蒲団^{ふとん}の中へ引き入れたらしい。もう少し熱心に聞けばよいのにと源氏は物足りない。

「私は縁の近くのほうへ行つて寝ます。暗いなあ」

子供は燈心を掻き立てたりするものしかつた。女は襖子の所からすぐ斜^{すじ}いにあたる辺で寝ているらしい。

「中将はどこへ行つたの。今夜は人がそばにいてくれないと何だか心細い気がする」

低い下の室のほうから、女房が、

「あの人ちようどお湯にはいりに参りまして、すぐ参ると申しました」

と言つていた。源氏はその女房たちも皆寝静まつたところに、掛鉄^{かけがね}をはずして引いてみると襖子はさつとあいた。向こう側には掛鉄がなかつたわけである。そのきわに几帳^{きちよう}が立ててあつた。ほのかな灯^ひの明りで衣服箱などがごたごたと置かれてあるのが見える。源氏はその中を分けるようにして歩いて行つた。

小さな形で女が一人寝ていた。やましく思いながら顔を掩^{おほ}うた着物を源氏が手で引きの

けるまで女は、さつき呼んだ女房の中将が来たのだと思っていた。

「あなたが中将を呼んでいらつしやったから、私の思いが通じたのだと思って」

と源氏の宰相さいししょうのちゆうじょう中将は言いかけたが、女は恐ろしがって、夢に襲われているよう

なふうである。「や」と言うつもりがあるが、顔に夜着がさわって声にはならなかった。

「出来心のようにあなたは思うでしょう。もっともだけれど、私はそうじゃないのですよ。ずっと前からあなたを思っていたのです。それを聞いていただきたくないのでこんな機会を待っていたのです。だからすべて皆ぜんしやう前生の縁が導くのだと思ってください」

柔らかい調子である。神様だつてこの人には寛大であらねばならぬだろうと思われる美しさで近づいているのであるから、露骨に、

「知らぬ人がこんな所へ」

とものしることができない。しかも女は情けなくてはならないのである。

「人まちがえでいらつしやるのでしよう」

やつと、息よりも低い声で言った。当惑しきつた様子が柔らかい感じであり、可憐かれんでもあった。

「違うわけがないじやありませんか。恋する人の直覚であなだと思つて来たのに、あな

たは知らぬ顔をなさるのだ。普通の好色者がするような失礼を私はしません。少しだけ私の心を聞いていただければそれでよいのです」

と言つて、小柄な人であつたから、片手で抱いて以前の襖からかみ子の所へ出て来ると、さつき呼ばれていた中将らしい女房が向こうから来た。

「ちよいと」

と源氏が言つたので、不思議がつて探り寄つて来る時に、薰たき込めた源氏の衣服の香が顔に吹き寄つてきた。中将は、これがだれであるかも、何であるかもわかつた。情けなくて、どうなることかと心配でならないが、何とも異論のはさみようがない。並み並みの男であつたならできるだけの力の抵抗もしてみるはずであるが、しかもそれだつて荒だてて多数の人に知らせることは夫人の不名誉になることであつて、しないほうがよいのかもしれない。こう思つて胸をとどろかせながら従つてきたが、源氏の中将はこの中将をまったく無視していた。初めの座敷へ抱いて行つて女をおろして、それから襖子をしめて、

「夜明けにお迎えに来るがいい」

と言つた。中将はどう思うであろうと、女はそれを聞いただけでも死ぬほどの苦痛を味わつた。流れるほどの汗になつて悩ましそうな女に同情は覚えながら、女に対する例の誠

実な調子で、女の心が当然動くはずだと思われるほどに言っても、女は人間の掟おきてに許されて
いない恋に共鳴してこない。

「こんな御無理を承ることが現実のことであろうとは思われません。卑しい私ですが、軽け
蔑いべつしてもよいものだというあなたのお心持ちを私は深くお恨みに思います。私たちの階
級とあなた様たちの階級とは、遠く離れて別々のものなのです」

こう言つて、強さで自分を征服しようとしている男を憎いと思う様子は、源氏を十分に
反省さす力があつた。

「私はまだ女性に階級のあることも何も知らない。はじめての経験なんです。普通の多情
な男のようにお取り扱いになるのを恨めしく思います。あなたの耳にも自然はいつている
でしょう、むやみな恋の冒険などを私はしたこともありません。それにもかかわらず前生
の因縁は大きな力があつて、私をあなたに近づけて、そしてあなたからこんなにはずかし
められています。ごもつともだとあなたになつて考えれば考えられますが、そんなことを
するまでに私はこの恋に盲目になつています」

まじめになつていろいろと源氏は説くが、女の冷ややかな態度は変わっていくけしきも
ない。女は、一世の美男であればあるほど、この人の恋人になつて安んじている自分には

なれない、冷血的な女だと思われてやむのが望みであると考えて、きわめて弱い人が強さをしいてつけているのは弱竹なよたけのようで、さすがに折ることはできなかった。真からあさましいことだと思うふうに泣く様子などが可憐かれんであつた。気の毒ではあるがこのままで別れたらのちのちまでも後悔が自分を苦しめるであろうと源氏は思つたのであつた。

もうどんなに勝手な考え方をしても救われない過失をしてしまったと、女の悲しんでいるのを見て、

「なぜそんなに私が憎くばかり思われるのですか。お嬢さんか何かのようにあなたの悲しむのが恨めしい」

と、源氏が言うのと、

「私の運命がまだ私を人妻にしません時、親の家の娘でございました時に、こうしたあなたの熱情で思われましたのなら、それは私の迷いであつても、他日に光明のあるようなことも思つたでございましょうが、もう何もだめでございます。私には恋も何もいりません。ですからせめてなかつたことだと思つてしまつてください」

と言う。悲しみに沈んでいる女を源氏ももつともだと思つた。真心から慰めの言葉を発しているのであつた。

鶏とりの声がしてきた。家従たちも起きて、

「寝坊をしたものだ。早くお車の用意をせい」

そんな命令も下していた。

「女の家へ方違かたがえにおいでになった場合とは違いますよ。早くお帰りになる必要は少しもないじゃありませんか」

と言っているのは紀伊守であつた。

源氏はもうまたこんな機会が作り出せそうでないことと、今後どうして文通をすればよいか、どうもそれが不可能らしいことで胸を痛くしていた。女を行かせようとしてもまた引き留める源氏であつた。

「どうしてあなたと通信をしたらいいでしょう。あくまで冷淡なあなたへの恨みも、恋も、一通りでない私が、今夜のことだけをいつまでも泣いて思っていなければならぬのですか」

泣いている源氏が非常に艶えんに見えた。何度も鶏とりが鳴いた。

つれなさを恨みもはてぬしのめにとりあへぬまで驚かすらん

あわただしい心持ちで源氏はこうささやいた。女は己おのれを省みると、不似合いという晴がましさを感じずにいられない源氏からどんなに熱情的に思われても、これをうれしいこととすることができないのである。それに自分としては愛情の持てない良人おとこのいる伊予の国が思われて、こんな夢を見てはいないだろうかと考えると恐ろしかった。

身の憂うれさを歎なげくにあかで明くる夜はとり重ねても音ねぞ泣かれける

と言った。ずんずん明るくなつてゆく。女は襖からかみ子の所へまで送つて行つた。奥のほうの人も、こちらの縁のほうの人も起き出して来たんでざわついた。襖子をしめてもとの席へ歸つて行く源氏は、一重の襖子が越えがたい隔ての関のように思われた。

直衣のうしなどを着て、姿を整えた源氏が縁側の高欄こうらんによりかかっているのが、隣室の縁低いついたて衝立の上のほうから見えるのをぞいて、源氏の美の放つ光が身の中へしみ通るように思っている女房もあった。残月のあるところで落ち着いた空の明かりが物をさわやかに照らしていた。変わったおもしろい夏の曙あけぼのである。だれも知らぬ物思いを、心に抱いた源氏

であるから、主観的にひどく身にしむ夜明けの風景だと思った。言^{こと}づて一つする便宜がいではないかと思つて顧みがちに去つた。

家へ歸つてからも源氏はすぐに眠ることができなかった。再会の至難である悲しみだけを自分はしているが、自由な男でない人妻のあの人はこのほかにいろいろな煩^{はん}悶^{もん}があるはずであると思ひやつていた。すぐれた女ではないが、感じのよさを十分に備えた中の品だ。だから多くの経験を持つた男の言うことには敬服される点があると、品定め夜の話を思ひ出していた。

このごろはずつと左大臣家に源氏はいた。あれきり何とも言つてやらないことは、女的身にとつてどんなに苦しいことだろうと中川の女のことがあわれまれて、始終心にかかつて苦しいはてに源氏は紀伊守を招いた。

「自分の手もとへ、この間見た中納言の子供をよこしてくれないか。かわいい子だったからそばで使おうと思う。御所へ出すことも私からしてやろう」

と言うのであつた。

「結構なことでございます。あの子の姉に相談してみましよう」

その人が思わず引き合いに出されたことだけでも源氏の胸は鳴つた。

「その姉さんは君の弟を生んでいるの」

「それでもございませぬ。この二年ほど前から父の妻になっていますが、死んだ父親が望んでいたことではないような結婚をしたと思うのでしょうか。不満らしいということでございます」

「かわいそうだね、評判の娘だったが、ほんとうに美しいのか」

「さあ、悪くもないのでございましょう。年のいった息子むすこと若い継母は親しくせぬものと申しますから、私はその習慣に従っておりまして何も詳しいことは存じませぬ」

と紀伊守きいのかみは答えていた。

紀伊守は五、六日してからその子供をつれて来た。整った顔というのではないが、艶えんな風采ふうさいを備えていて、貴族の子らしいところがあった。そばへ呼んで源氏は打ち解けて話してやった。子供心に美しい源氏の君の恩顧を受けうる人になれたことを喜んでいた。姉のことも詳しく源氏は聞いた。返辞のできることは返辞をして、つつしみ深くしている子供に、源氏は秘密を打ちあけにくかった。けれども上じょうず手に嘘うそまじりに話して聞かせると、そんなことがあったのかと、子供心におぼろげにわかればわかるほど意外であったが、子供は深い穿鑿せんさくをしようとしもない。

源氏の手紙を弟が持つて来た。女はあきれて涙さえもこぼれてきた。弟がどんな想像するだろうと苦しんだが、さすがに手紙は読むつもりらしくて、きまりの悪いのを隠すように顔の上でひろげた。さつきからだは横にしていたのである。手紙は長かった。終わりに、

見し夢を逢ふ夜ありやと歎く間に目さへあはでぞ頃も経にける

安眠のできる夜がないのですから、夢が見られないわけです。

とあった。目もくらむほどの美しい字で書かれてある。涙で目が曇って、しまいには何も読めなくなつて、苦しい思いの新しく加えられた運命を思い続けた。

翌日源氏の所から小君が召された。出かける時に小君は姉に返事をくれと言った。

「ああしたお手紙をいただくはずの人がありませんと申し上げればいい」と姉が言った。

「まちがわないように言っていらいつたのにそんなお返辞はできない」
そう言うのから推せば秘密はすっかり弟に打ち明けられたものらしい、こう思うと女は

源氏が恨めしくてならない。

「そんなことを言うものじゃない。大人の言うようなことを子供が言つてはいけない。お断わりができればお邸^{やしき}へ行かなければいい」

無理なことを言われて、弟は、

「呼びにおよこしになったのも、伺わないでは」

と言つて、そのまま行つた。好色な紀伊守はこの継母が父の妻であることを惜しがつて、取り入りたい心から小君にも優しくしてつれて歩きもするのだつた。小君が来たというので源氏は居間へ呼んだ。

「昨日^{きのう}も一日おまえを待つていたのに出て来なかつたね。私だけがおまえを愛していても、おまえは私に冷淡なんだね」

恨みを言われて、小君は顔を赤くしていた。

「返事はどこ」

小君はありのままに告げるほかに術^{すべ}はなかつた。

「おまえは姉さんに無力なんだね、返事をくれないなんて」

そう言つたあとで、また源氏から新しい手紙が小君に渡された。

「おまえは知らないだろうね、伊予の老人よりも私はさきに姉さんの恋人だったのだ。頸くびの細い貧弱な男だからといって、姉さんはあの不恰好ぶかつこうな老人を良人おつとに持って、今だって知らないなどと言って私を輕蔑けいべつしているのだ。けれどもおまえは私の子になっておれ。姉さんがたよりになっている人はさが短いよ」

と源氏がでたらめを言うと、小君はそんなこともあったのか、済まないことをする姉さんだと思う様子をかわいく源氏は思った。小君は始終源氏のそばに置かれて、御所へもいっしょに連れられて行ったりした。源氏は自家の衣裳いしやうがかり係に命じて、小君の衣服を新調させたりして、言葉どおり親代わりらしく世話をしていた。女は始終源氏から手紙をもらった。けれども弟は子供であつて、不用意に自分の書いた手紙を落とすようなことをしたら、もともと不運な自分がまた正しくもない恋の名を取って泣かねばならないことになるのはあまりに自分がみじめであるという考えが根底になつていて、恋を得るということもこちらにその人の対象になれる自信のある場合にだけあることで、自分などは光源氏の相手になれる者ではないと思う心から返事をしないのであつた。ほのかに見た美しい源氏を思い出さないわけではなかつたのである。真実の感情を源氏に知らせてもさして何にもなるものでないと、苦しい反省をみずから強いている女であつた。源氏はしばらくの間もその

人が忘れなかつた。氣の毒にも思い恋しくも思つた。女が自分とした過失に苦しんでいる様子が目から消えない。本能のおもむくままに忍んであいに行くことも、人目の多い家であるからそのことが知れては困ることになる、自分のためにも、女のためにも思つては煩悶はんもんをしていた。

例のようにまたずつと御所にいた頃、源氏は方角の障さわりになる日を選んで、御所から来る途中でにわかにながついたふうをして紀伊守の家へ来た。紀伊守は驚きながら、

「前裁せんさいの水の名譽でございます」

こんな挨拶あいさつをしていた。小君こきみの所へは昼のうちからこんな手はずにすると源氏は言つてやつてあつて、約束ができていたのである。

始終そばへ置いてゐる小君であつたから、源氏はさつそく呼び出した。女のほうへも手紙は行つていた。自身に逢おうとして払われる苦心は女の身にうれしいことではあつたが、そうかといつて、源氏の言うままになつて、自己が何であるかを知らないように恋人として逢う氣にはならないのである。夢であつたと思うこともできる過失を、また繰り返すことになつてはならぬとも思つた。妄想もうそうで源氏の恋人氣どりになつて待つてゐることは自分にできないと女は決めて、小君が源氏の座敷のほうへ出て行くとすぐに、

「あまりお客様の座敷に近いから失礼な気がする。私は少しからだが悪くて、腰でもたたいてほしいのだから、遠い所のほうが都合がよい」

と言つて、渡殿わたどのに持つている中将という女房の部屋へやへ移つて行つた。初めから計画的に來た源氏であるから、家従たちを早く寝させて、女へ都合を聞かせに小君をやつた。小君に姉の居所がわからなかつた。やつと渡殿の部屋を捜しあてて來て、源氏への冷酷な姉の態度を恨んだ。

「こんなことをして、姉さん。どんなに私が無力な子供だと思われるでしょう」
もう泣き出しそうになっている。

「なぜおまえは子供のくせによくない役なんかするの、子供がそんなことを頼まれてるのはとてもいけないことなのだよ」

としかつて、

「気分が悪くて、女房たちをそばへ呼んで介抱かいほうをしてもらつていますって申せばいいだろう。皆が怪しがりますよ、こんな所へまで來てそんなことを言つていて」

取りつくしまもないように姉は言うのであつたが、心の中では、こんなふうな運命が決まらないころ、父が生きていたころの自分の家へ、たまさかでも源氏を迎えることができ

たら自分は幸福だったであろう。しいて作るこの冷淡さを、源氏はどんなにわが身知らずの女だと思ひになることだろうと思つて、自身の意志でしていることであるが胸が痛いようにさすがに思われた。どうしてもこうしても人妻という束縛は解かれないのであるから、どこまでも冷ややかな態度を押し通して変えまいという氣に女はなつていた。

源氏はどんなふうに計らつてくるだろうと、頼みにする者が少年であることを氣がかりに思いながら寝ているところへ、だめであるという報せしらを小君が持つて來た。女のあさましいほどの冷淡さを知つて源氏は言つた。

「私はもう自分が恥ずかしくつてならなくなつた」

氣の毒なふうであつた。それきりしばらくは何も言わない。そして苦しといそうに吐息いきをしてからまた女を恨んだ。

是はきぎ
帚木はきぎの心を知らでその原の道にあやなくまどひぬるかな

今夜のこの心持ちはどう言つていいかわからない、と小君に言つてやつた。女もさすがに眠れないで悶もだえていたのである。それで、

数ならぬ伏屋^{ふせや}におふる身のうきにあるにもあらず消ゆる帚木

という歌を弟に言わせた。小君は源氏に同情して、眠がらずに往^いったり来たりしているのを、女は人が怪しまないかと気にしていた。

いつものように酔った従者たちはよく眠っていたが、源氏一人はあさましくて寝入れない。普通の女と変わった意志の強さのますます明確になってくる相手が恨めしくて、もうどうしてもよいとちよつとの間は思うがすぐにまた恋しさがかえってくる。

「どうだろう、隠れている場所へ私をつれて行ってくれないか」

「なかなか開^あきそうにもなく戸じまりがされていますし、女房もたくさんおります。そんな所へ、もつたいたいことだと思ひます」

と小君が言った。源氏が気の毒でたまらないと小君は思っていた。

「じやあもういい。おまえだけでも私を愛してくれ」

と言つて、源氏は小君をそばに寝させた。若い美しい源氏の君の横に寝ていることが子供心に非常にうれしいらしいので、この少年のほうが無情な恋人よりもかわいいと源氏は

思
つ
た。
。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：鈴木厚司、小林繁雄

2003年4月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

帚木

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>